

活動報告 (2015.1～2015.12)

(1) 所員会議

第1回 2015年5月14日(木)

議 題

1. 2014年度事業報告および決算報告について
2. 2015年度事業計画および予算について
3. 総合郷土研究所構成員の加入・継続申請について
4. プロジェクトルームの廃止について

(2) 運営委員会

第9回 2015年2月12日(木)

議 題

1. 2015年度シンポジウム開催について
2. 2015年度地域見学会開催について

第1回 2015年4月9日(木)

議 題

1. 2014年度事業報告および決算報告について
2. 2015年度事業計画および予算について
3. 総合郷土研究所構成員の加入・継続申請について
4. プロジェクトルームの廃止について
5. 研究費の執行について
6. 所員会議開催日について

第2回 2015年5月28日(木)

議 題

1. 前期購入図書のアンケートについて
2. 研究費の執行について
3. 2016年度ブックレット執筆希望者の募集について
4. プロジェクトルームの利用について

第3回 2015年6月25日(木)

議 題

1. 2015年度紀要第61輯の発行について

第4回 2015年7月15日(木)

議 題

1. 前期購入図書について
2. 平成27年度立命館大学受託研究および間接経費使用計画書について

第5回 2015年9月24日(木)

議 題

1. 2015年度紀要第61輯の執筆者について
2. 後期図書購入について
3. 2015年度補正予算申請について
4. 2016年度新規予算申請について

第6回 2015年10月22日(木)

議 題

1. 2015年度紀要第61輯の執筆者について
2. 後期図書購入について
3. 2016年度新規予算申請について

第7回 2015年11月26日(木)

議 題

1. 2016年度予算申請について

第8回 2015年12月17日(木)

議 題

1. 2016年度予算申請について
2. 非常勤所員、研究員および補助研究員の継続確認について

(3) シンポジウム

日 時：2015年11月28日(土)14時～17時

場 所：愛知大学豊橋校舎 本館5階第3・4会議室

テーマ：「三河・遠江の伝統芸能の歴史と現在、その継承に向けて」

基調講演：「民俗芸能の真正性・正統性はいかに維持されてきたか——人・制度・時間・空間」

講 師：藤田隆則（京都市立芸術大学教授）

事例報告：「笑顔と心を伝える」

講 師：杉浦重夫

（安城の三河万歳保存会副会長）

事例報告：「公共劇場が担う地域人材の育成について」

講 師：矢作勝義（穂の国とよはし芸術劇場 PLAT 芸術文化プロデューサー）

総合討論

(4) 公開講演会

日 時：2015年2月14日(土)13時30分～15時30分

場 所：愛知大学豊橋校舎 6号館 1階610教室

演 題：「新城市川田原古墳群の発掘調査とその周辺」

講 師：井口喜晴（総合郷土研究所非常勤所員、高浜市やきもの里かわら美術館館長）

日 時：2015年7月11日(土)14時～16時

場 所：愛知大学豊橋校舎 本館 5階第3・4会議室

演 題：「大井川流域の自然・文化・観光」

講 師：天野景太（総合郷土研究所研究員、大阪市立大学准教授）
安福恵美子（総合郷土研究所所員、地域政策学部教授）

(5) 刊行物

愛知大学総合郷土研究所紀要 第60輯
大井川流域の自然・文化・観光（ブックレット24）

(6) 地域見学会

文 責：近藤暁夫

日 時：2015年5月17日(日)

テーマ：歴史と文学の散歩道——伊勢物語「八橋」の舞台を巡る

見学地：愛知県刈谷市・知立市（第2図参照）

参加者：42名（学生32名）

■企画概要

2015年度の地域見学会は、前年度が秋開催であったが、この日程では講演会等研究所の他の行事と重なるという反省を踏まえ、春開催を目指して準備を行った。春期の場合、4月では学生（特に1年生）への周知期間が足りないこと、6月以降は梅雨に差し掛かることから、5月開催が妥当であると判断した。この日程を前提に、運営委員会で議論していく中で、5月が愛知県の県花「カキツバタ」の開花期にあたることから、この花とからめたテーマで進めることが提案され、賛同が得られた。

そこで、具体的な見学地として日本三大カキツバタ群落のひとつである刈谷市の小堤西池と、カキツバタが登場することで名高い伊勢物語「八橋」の舞台である知立市八橋に焦点を当て、そこに周辺の史跡名勝を組み込む形で企画を立てた。特に、郷土研の活動と関係の深い、「文学」ならびに「歴史」と絡めたストーリー性のある企画内容にするように準備を進めた。

最終的に、テーマは「歴史と文学の散歩道——伊勢物語「八橋」の舞台を巡る」となった（第1図）。地域見学会参加者に対して行ったアンケート（第1表）においても「伊勢物語関連の所に行けて良かった。在原業平も千年以上前に今日私が通ったのと同じ道を通ったのかもしれないと思うと感慨深かった」「古代のことから近世のことまで幅広く学ぶことができた。1日で様々な場所に行

けてよかった」「歴史的、地理的、文学的要素をふまえたツアー構成であったので、多面的な視点で地域を見ることができた」などの好意的な感想が多く寄せられ、企画の狙いは達成できたものと考えている。

■当日のタイムスケジュール・見学地

当日のタイムスケジュールと行程を第1図、第2図に示す。以下、簡単に当日の行程と内容を説明する。

9時に愛知大学豊橋キャンパスに集合し、大型バスに乗車、出発する。バスの補助席を使うほどの盛況である。車中では、まずスタッフの挨拶ののち、パンフレット（A4判で12ページ）をもとに当日のスケジュール等について説明を行った。そののち、伊勢物語ならびに三河八橋（八橋は物語の第9段「東下り」に登場する）についての基礎知識を得ることを目的として、ビデオ（ビデオ古典名作撰 伊勢物語：25分）の上映を行った。さらに、和田明美先生（文学部教授：所員）による伊勢物語と三河八橋の関係についての45分程度の解説をいただいた。先生自作の配布資料をもとにした、八橋の和歌（からごろも きつつなれにし つましあれば はるばるきぬる たびをしぞおもふ）の逐語解説、古典文学における三河八橋の位置付け、伊勢物語「八橋」が後世の文学に及ぼした影響などについての、専門家ならではの幅広くかつ平易な解説は、車中の時間を忘れさせるものであった。また、車中では伊勢物語の八橋が名称の由来とも言われている京都の銘菓「八ッ橋」も配布した。

東名高速三好ICを経て、まず愛知大学名古屋キャンパス跡を車窓観察し、さらに尾張・三河国境の境川を通過し、境川沿いを下りながら最初の訪問地である刈谷市小堤西池を目指した。これらの「寄り道」は、参加者に当地域の地勢についての基本的な理解をってもらうよう、配慮しつつのルート設定であ

る。

洲原公園駐車場にバスを止め、11時前に小堤西池のカキツバタ群落（国天然記念物）に到着した。伊勢物語に語られるように、当地域にはカキツバタの群生が多くみられたが、現在、自生地として残っているのは小堤西池のみとなっている。当日は快晴で、カキツバタもよく咲いており、参加者は散策と撮影を楽しんでいた。

道中で昼食用の弁当を積み込み、12時ごろ無量寿寺に到着した。伊勢物語八橋の伝説地は当寺から西方約700mの逢妻男川沿いにあり、無量寿寺もカキツバタの名所として知られている（第3図）。境内に公園も整備されていることから、当地で自由散策ならびに昼食を各自取ってもらうこととした。伊勢物語「東下り」においては、昔男（在原業平に比定されている）が逢妻男川のほとりで干飯を食べながら和歌を詠んだとの記述があるが、それに倣って参加者も野外で昼食を取ってもらうという趣旨（さすがに、現代で干飯を食べるわけにはいかないので、普通の弁当であった）である。当日は、無量寿寺の隣の日吉神社の祭礼日にもあたっており、賑やかな昼食となった。神社横には、市営の「八橋史跡保存館」がある。昼食後ここに再集合して見学をし、次の目的地に移動した。

知立は、八橋のほか、東海道の池鯉鮒宿に起源をもつ宿場町としても著名である。午後は、歴史を下って近世・近代の知立を地域見学する形で企画を進めた。まず、バスで旧東海道の松並木と明治用水西井筋が並走する道路を通り、現在も歴史的な景観が受け継がれていることを確認したのち、知立市歴史民俗資料館を見学した。なお、当資料館に隣接した図書館には、本学日本史学専攻の卒業生が勤務しており、当日は参加した日本史学専攻の学生たちに励ましの言葉もかけてもらった。

資料館見学後は、知立神社にバスを止め、

まず宮司さんに神社の歴史と祭神についてのお話を頂戴した(写真1)。その上で、神社を拠点に東海道の町並みを各自散策する時間をとった。池鯉鮒宿には、現在、往時を直接偲ばせる建物はほとんどなく、本陣跡にも石碑が建つのみとなっている。しかし、町割り自体は健在であり、近世以前に築城され、後に宿場町と一体化した知立古城址も公園として整備されている。また、知立市歴史民俗資料館が当時の町割りと現在の町並みを比較対照できるパンフレットを作成しているのので、今回はこれを援用して各自地図をもとに散策してもらうようにした。旧宿場町には、今日知立市の名物となっている「大あんまぎ」の元祖といわれる店舗もあり、ここで舌鼓を打つ参加者もいた。

帰路は東名高速の豊明ICから乗車したが、ここで再び2回ほど境川を渡ることになった。渡河の瞬間には、すっかりこの地域にうちとけた学生たちが、バスの中で歓声を上げていた。途中、刈谷ハイウェイオアシスで休憩をとった。2004年に開業した当オアシスは、観覧車や温泉施設も備えた、高速道路のパーキングエリアでありながら、周辺住民をも集客する観光施設として機能している、当地域の「現代」を代表する施設である。近年では、熱田神宮や東山動植物園を越える来客数を得ており、新形態の観光施設として全国的にも注目されている。当初は、1時間程度休憩と見学を行う予定でいたが、途中の時間調整の都合で短い滞在となったのが惜まれる。

こののち、豊橋駅前で一旦希望者を降ろし、当初の予定通り17時半に愛知大学豊橋校舎にて解散した。全体として、学生を中心に昨年度を大きく上回る参加者を得、好天にも恵まれ、成功した地域見学会だったと考えている。

■参加者のアンケートから

参加者(スタッフを除く)に配布したアンケートから、感想を簡単に抜き出す。第1表にあるように、概ね、参加者からは好評を得られた。また、来年度の参加にも前向きな回答が多かった。もっとも、今回の参加者も、参加理由は「誘われて」という必ずしも自発的な理由ではないものが多い。企画の質については概ね評価が得られているので、企画の魅力を十分に伝えて口コミにつなげ、参加を促す広報体制を継続することが重要であろう。

個別の感想では、「かきつばたを初めて見た」「八橋の舞台を見られて感慨深かった」など、知識としては知っていても、実際にはなかなか行くことができない場所に行けたことへの好意的な感想が多く寄せられた。また、「先生の話が勉強になる」「なるほどと思うことがたくさんあった」という感想もあり、専門的な解説を直接現地で得られるという本企画の特長は十分に示せたと考えている。

その反面、「自由時間が短い」「知立神社周辺をもっと散策したかった」「帰着時間がもう少し早いほうがよい」など、タイムスケジュール面での不満がみられた。盛り沢山の内容にしたいと思うのが企画側の人情であるが、特定の地域に関して、じっくり腰を据えて見学するというのも、地域見学会のひとつの趣旨であろうことから、今後の反省材料といえる。また、今回は知立駅など交通の結節点を通ったことから、近隣に居住する参加者等から途中下車できないかとの要望が多く出された。運営面での難しさはあるが、特に帰路に関しては解散場所の柔軟な対応も検討する余地がある。

■2016年度の地域見学会

アンケートで、来年度の企画で行きたい地域を訪ねたところ、「犬山城」などの城郭や、足助、中山道、千枚田、花祭りなど、三河の

山間部への興味関心が多く寄せられた。これは、専門家の案内で城郭や史跡、街並みを見学したいという要望や、普段、特に車を持たない学生では行きにくい三河山間部に地域見学会を利用して行きたいという要望の現われであろう。また、中部5県を扱うという郷土研の趣旨からは外れるが「京都」という要望も複数寄せられた。確かに遠距離ではあるが、今回の企画も「伊勢物語東下り」という、京都と三河の関係に焦点を当てたものであるのだから、企画次第で中部5県を外れても郷土研ならではの見学会企画が打てる可能性があるだろう。いずれにせよ、地域見学会の企画は、スタッフが郷土研の所員や学生たちと協同して作り上げていくものであろうから、今後とも、ぜひとも各方面の方々から積極的な要望や提言をお願いしたい。

なお、これらの要望等をもとに運営委員の間で検討した結果、2016年度の地域見学会は、2016年5月15日(日)に、愛知県豊田市足助の城郭と自然、歴史的町並みを見学するこ

とに決定し、現在準備を進めている。詳細は掲示やチラシでお伝えできると思うが、どうか2016年度の地域見学会にも奮ってご参加いただければ幸甚である。

■謝辞

地域見学会の実施にあたって、知立市観光協会をはじめとする知立市・刈谷市の皆さまには、企画の相談に乗っていただいた他、パンフレット等資料のご提供をいただきました。知立市歴史民俗資料館、知立神社の皆さまには、駐車場等の便宜をはかっていただき、同時に施設のご案内をしていただきました。和田明美先生には、他にもご予定のある中、午前中だけという無理をお願いし、伊勢物語についてのご解説をいただきました。当日の参加者の皆さまには、アンケートにご協力いただきました。見事な運転技術でスタッフのマニアックなルート設定に完璧にお応えいただいたバスの運転手の方を含め、末筆ながら記して感謝申し上げます。



写真1 知立神社にて



愛知県の花「かきつばた」

2015年度 愛知大学総合郷土研究所 地域見学会

2015年5月17日(日)

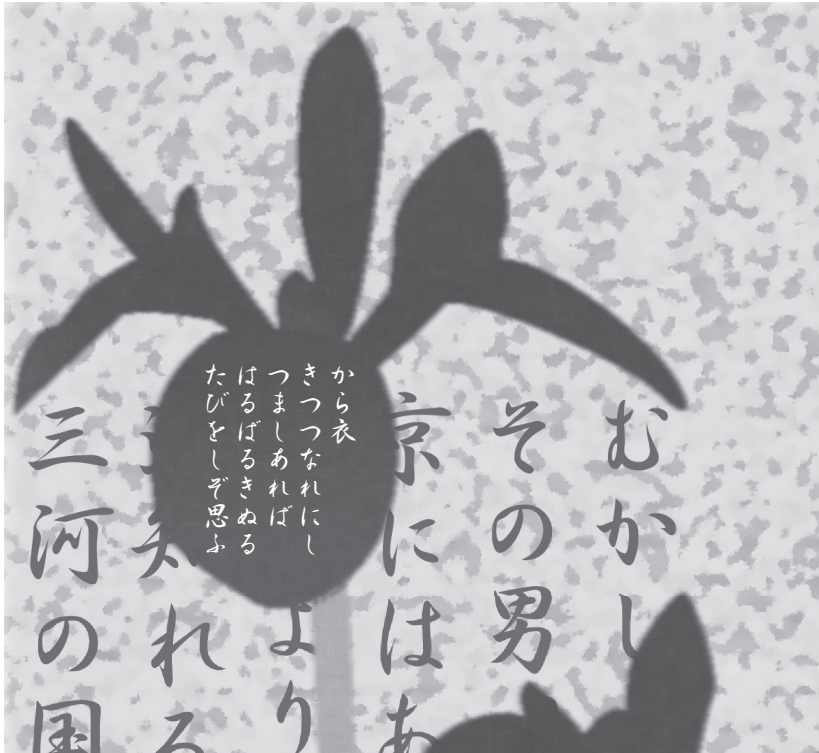
歴史と文学の散歩道

伊勢物語

「八橋」

の舞台を巡る

バス見学会



タイムスケジュール

- 9:00 愛知大学豊橋キャンパス集合・出発
車中にて行程の事前学習(和田明美先生)
- 10:20 愛知大学旧名古屋キャンパス跡地・境川などを車窓観察
- 10:30 刈谷市洲原公園駐車場で。徒歩で小堤西池カキツバタ群落を見学(11:20まで)。
- 11:40 知立市文化広場駐車場で。伊勢物語の故地を散策しつつ各自昼食(弁当を配布)。
- 13:00 八橋史跡保存館集合。見学。
- 13:20 知立市文化広場出発、13:30 知立市歴史民俗資料館で。見学。
- 14:10 知立神社着。参拝。知立古城、旧東海道池鯉鮒宿などを散策。
- 15:00 知立神社出発。
- 15:10 伊勢湾岸道路刈谷ハイウェイオアシスで休憩(16:20まで)。
- 17:30 愛知大学豊橋キャンパスにて解散(途中・希望者は豊橋駅で下車も可能)。

案内人

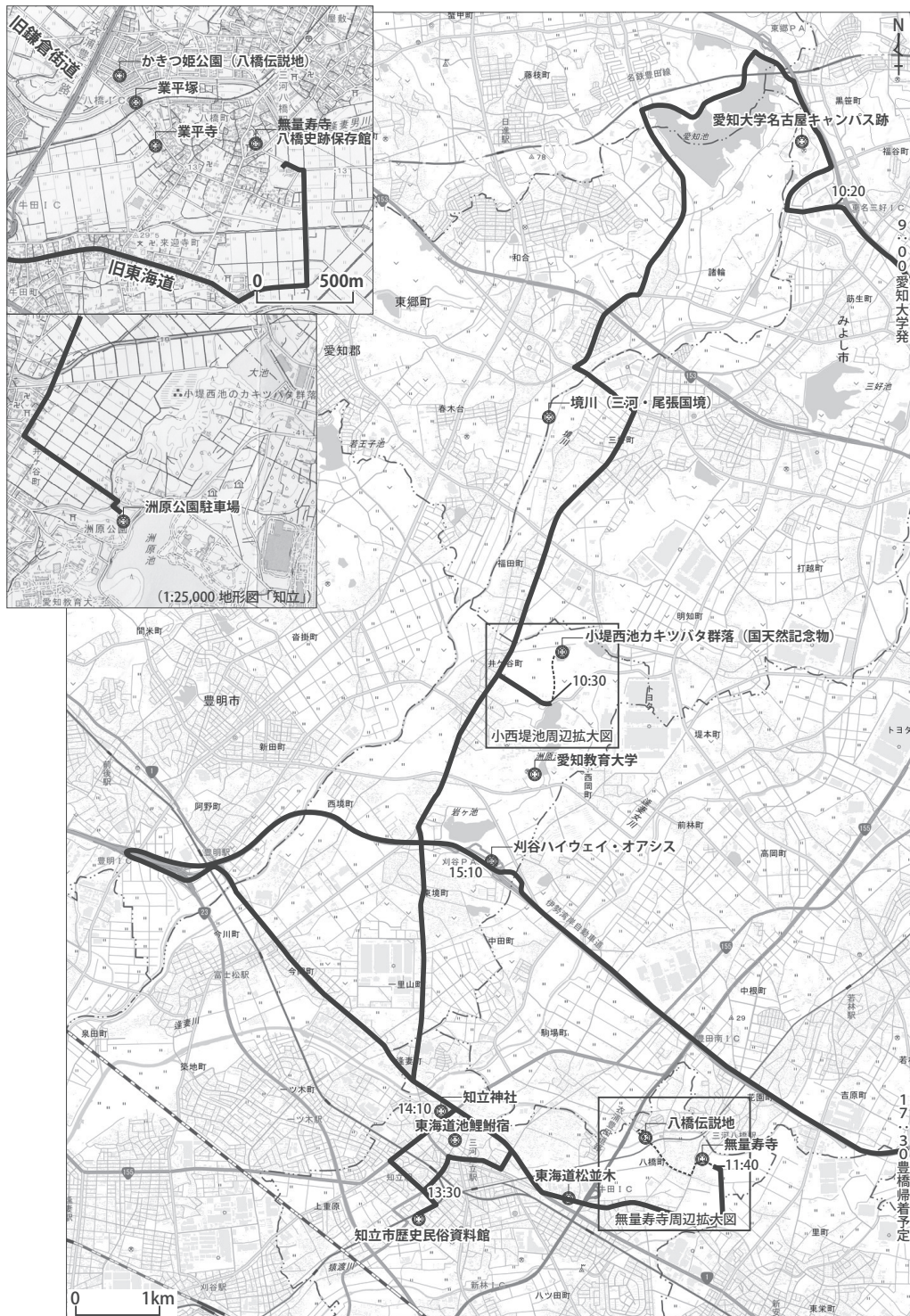
近藤暁夫(地理学)
神谷智(日本近代史・総合郷土研究所長)
和田明美(日本語学・日本古典文学)ほか

■ 愛知大学総合郷土研究所
電話 0532-47-4160 (内線 1800)
E-mail kyodoken@ml.aichi-u.ac.jp

第1図 地域見学会当日配布パンフレットの表紙ならびにタイムスケジュール

- ・原本はA4カラー(第2図も同様)
- ・交通事情等により、実際のタイムスケジュールやルートとは若干の相違が出たが、パンフレットのままとした。

活動報告



第2図 地域見学会の行程（時刻はおおよその予定）

・2014年調製2万5千分の1地形図「知立」ならびに地理院地図 (<http://maps.gsi.go.jp/>) に加筆。



問 どのカキツバタでしょう

①カキツバタが描かれた五千円札
②五千円札の拡大コピーを示し、
来場者に説明するガイドボランティアの男性(左)=1日、愛知県知立市の無量寿寺で



五千円札の裏面に描かれたカキツバタのモチーフは愛知県知立市八橋の花だ。たとして、市民らが同所の八橋かきつばた園が見学を歓迎するために合わせてPR活動をしている。

「五千円札の裏のカキツバタは知立市八橋のもので間違いないよ」と。同園の園主「燕子花園」。伊勢の入り口付近で、五千円札を拡大し見本を手に、観光ガイドボランティアが声をそろえて。

地元からの来園者に聞く「知っている人」と知らない人はおよそ半数ずつ。同市の会社員杉浦元泰さん(48)は「数年前まで知らなかった。全国的には知立を知らない人もいる。お札の話でもっとアピールしてほしい」と。

「五千円札の裏面の図柄は江戸時代の画家、尾形光琳作の国宝『燕子花図』。伊勢物語に出てくる和歌をモチーフにしたとされる。平安の歌人、在原業平は八橋でカキツバタを見て、「からくろも、きつなれに、つらまじあれは、はるばるきぬる、旅をしを思ふ」と句の先頭がカキツバタとなる歌を詠んだと伝えられる。光琳に詳しい河野元昭東京大名堂教授は「燕子花図」が八橋のカキツバタであることは間違いない」と。



林郁夫市長(左)は「知立に関係する図柄がお札に載るのは何にも誉え難い財産。地元若者も知らないの、もっと知らせていきたい」と話している。

市民が観光PR ちなみにいま見ごろです 愛知/豊平 時

第3図 知立市八橋のカキツバタを紹介する新聞記事 (中日新聞2015年5月2日)

第1表 地域見学会参加者アンケート回答結果の集計 (配布・回収35件)

問：企画への満足度	問：参加のきっかけ	問：来年も参加したいか			
大満足	6	チラシ・掲示をみて	8	ぜひ参加したい	3
まあ満足	23	先生や同僚に誘われて	23	企画次第では参加したい	24
普通	6	友達に誘われて	4	参加する気はない	0
やや不満	0	その他	0	わからない	6
不満	0			無回答	2

(7) 資料整理作業報告

2014年12月から2015年11月までにおこなった収蔵史料の整理について簡単に紹介する。

1. 新収蔵史料の目録作成

美濃国大野郡清水村立木家文書

(史料群 No. 281)

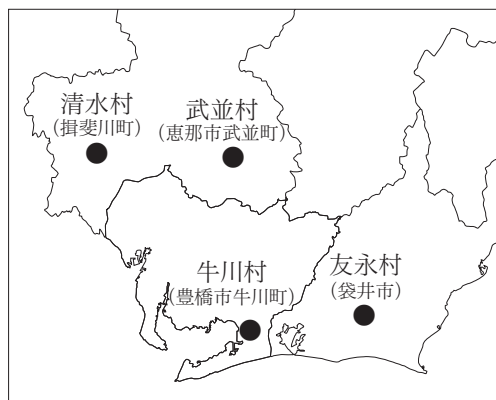
旗本清水岡田家に仕え、在地支配を担当した立木家の旧蔵史料254点。2013年に当研究所の物品庫より発見されたもので、収蔵の経緯は不明である。

清水岡田家は、寛文10年(1670)に美濃代官岡田善政(揖斐岡田家)の六男左太郎善紀が、善政の知行地から清水村・長良村(ともに現、岐阜県揖斐郡揖斐川町)のうちに1200石を分知されて成立した家である。立木家は、清水岡田家の陣屋のあった清水村に住んで領内の民政を担当した(『揖斐川町史』)。

この史料群の中心は、立木家から岡田家の江戸屋敷へ宛てた書状の下書きおよび江戸屋敷から立木家に宛てた書状である。書状の下書きは反古紙の裏を利用して書かれているため非常に読みづらいが、立木家が江戸の岡田家と村人との間でどのような役割をはたしていたかが具体的にわかる興味深い内容である。近世の美濃地方の村々に特徴的な家格制度である頭百姓・脇百姓間の対立問題を利用して御用金の負担をしぶる頭百姓たちに献金を促すといった対応もみられる(No. 19・No. 20など)。19世紀前半のものが中心で、立木八十右衛門、立木民右衛門、立木弥十郎の名が多く見られる。なお、立木家をはじめとする清水陣屋の役人については、『岐阜県所在史料目録 第24集のII 諸家文書目録』所収の「上田功家文書」の目録解題が参考になる。

岐阜県恵那郡武並村山本家文書

(史料群 No. 284)



関係地図

武並村藤(現、岐阜県恵那市武並町藤)の山本家に関する史料で、本学卒業生の有賀勇夫氏より有蘭正一郎教授(文学部、本研究所所員)を通じて寄贈をうけた。点数は191点だが、襖の下貼りが多くあり、前後の関連が不明なものや貼り重ねられた状態のまま整理番号を付したのものもあるので、今後の調査の進展によっては増減することが予想される。

下貼り文書は近世から明治初年のもので、全体の3割ほどである。断片的なものばかりだが、山本家の儀助という人物が藤村の庄屋や戸長をつとめていることが確認できる。また、山本儀助宛の書状の中には米を売ってほしいと依頼する内容のものや(No. 161)、傘サマと記されているもの(No. 164)があることから、山本家は米の商いをおこなっていた可能性がある。村方の史料では、藤村の紙屋が村の楮を一括して買い取っていたことを示す通帳の一部(No. 158, No. 159)や、弘化3年(1846)に久須見村との間で起きた「小僧屋敷論所おるて栗拾ひ争論」に関する書付写(No. 124)がややまとまっている。

下貼り以外の史料は明治30年代から昭和10年代のものである。明治35年前後には武並村藤区長山本教造の名を確認することができる。この時代、山本家は蚕種製造や養蚕をおこなっている(No. 9, No. 26, No. 79, No. 84~87)。昭和12年から昭和14年の家計

の収支が記されたノート (No. 77) の「日雇人の覚」の項には「田植」「田の草とり」などに混じって「桑園耕作」など桑畑に関する作業が目立つ。明治30年の日記 (No. 20) にも桑畑の耕作や桑苗の植込みなど、養蚕に関する記事が目立つ。他に杉苗の植替えなどの記事もあり、武並村でおこなわれていた杉苗の植林活動の一端をうかがい知ることができる。

遠江国豊田郡友永村文書(4) (史料群 No. 286)

2015年度に古書店から購入したもので、点数は8点。古書店の目録に掲載されていた情報から、同じ古書店から昨年度購入した友永村文書と一連のものと考え、同じ史料群名をつけた。しかし、内容は明治10年(1877)から同11年の東京回漕米・買上米に関する願書控等5冊 (No. 1~No. 5)、旧袋井伝馬所の精算一件に関する綴1冊 (No. 6)、静岡県第十一大区宛の領収書綴 (No. 7)・大区会議事録他の綴 (No. 8) 各1冊など、遠州民会あるいは静岡県第十一大区関係の史料で、友永村に直接関係する史料は含まれていない。

昨年度購入した分については、友永村の西尾伝蔵家の旧蔵文書であることが判明している(紀要第60輯参照)。今回購入したものの中にも第十一大区詰副区長や大区会議長などとして西尾伝蔵の名が見えるが、これらが西尾家文書に入った経緯は不明である。

なお、8冊すべてに綴り直された痕跡がみとめられ、順序が入れ違っている箇所もある。また、天地や背が切りそろえられ、タイトルを記した表紙や中扉が新たに付け加えられているなど、あきらかに後世の人の手が加わっている。昨年度購入した史料についても再調査したところ、後世の人の手によって同時期の雑多な史料が綴られているものがあることが判明した。利用にあたってはこうしたことを考慮に入れて慎重を期す必要がある。

2. 八名郡牛川村松坂家文書の目録作成 (史料群 No. 10)

松坂家はもと肥後国熊本に加藤家に仕える家であったが、後に浪人となり、伊勢国松坂を経て三河国仁連木に移住、その後さらに飽海村に居を移し、味噌・酒の醸造、塩の売買等によって財をなしたといわれる。松坂家忠興の祖と称せられる五代重穆は、享和3年(1803)に吉田藩の御用達となり、文化2年(1805)に飽海村の家を娘婿に譲り、牛川村の田中新田(現、愛知県豊橋市)を買収して同地に移り住んだ(藤井隆「松坂重賜日記について」)。

本研究所在蔵している松坂家文書は、昭和27年(1952)に当時の松坂家のご当主具之輔氏からご寄贈いただいたものである(年代については具之輔氏の妹藤井里子氏のご教示による)。その後、昭和61年(1986)にも里子氏から夫の藤井隆氏を通じて古文書のご寄贈をいただいた。両者を併せた点数は本研究所在蔵している史料群の中で最大である。

松坂家文書は、文学部に史学科が設置された昭和31年以降、史学科の学生らによって整理と目録の作成がおこなわれてきた。しかし諸般の事情により活動の中断を余儀なくされ、整理途中のまま現在に至っている。

本研究所在蔵の松坂家文書を利用した研究には歌川學氏や三世善徳氏の豊川河口部の新田の研究があり(歌川學「梅村新田の成立」、三世善徳「三河国吉田領青竹新田」)、『愛知県史』には数点の史料が掲載されている。質量ともに豊かな史料群であり、利用が進めば近世・近代の東三河の歴史研究がいつそう深化することは間違いない。これまでに近世の講の請取りや新田経営に関する史料、御用達としての活動に関する史料など約3,000点を整理した。なかでも講の請取りは点数が多く、その種類の豊富さに興味をひかれる。

3. 目録刊行等に関する予備的作業

本研究所では、昭和26年の創設以来収集してきた4万点をこえる史資料を収蔵している。これらの史料の一部は資料叢書として活字化され、絵図・浮世絵・暦・引札については図録を刊行している。また、ホームページでは、収蔵している古文書のうち代表的な史料群を挙げている。しかしこれらは収蔵史料のほんの一部でしかなく、利用者からは、どんな史料があるのかわからない、目録を刊行してほしい、との声が寄せられている。地域文化・情報のセンターとして研究成果を発表していくことは本研究所の役割のひとつだが、収蔵史料をより多くの方々に利用していただける環境を整備し、開かれた研究所として地域の歴史研究の発展に貢献することもまた本研究所の目指すところであり、利用者からのこうした要望に応じていきたいと考えている。そこで、将来の目録刊行とウェブ上での公開を視野に入れた予備的作業をおこなった。対象としたのは旧渥美郡の史料である(表1参照)。

その結果、これらの史料については過去に目録が作成されているものの、近年の記録史料学の水準に照らして不備な点も多く、出版やウェブ上での公開にあたっては内容の点検が必要なことが判明した。また、過去の整理では、史料に付着したほこりを除去する等の長期保存・利用者への提供を考慮した作業はおこなわれておらず、ゴキブリの卵が付着したままである等、そのままでは利用者に提供できる状態ではない史料も複数あることが判明した。

(文責 臨時職員 内藤路子・荒木亮子)

史料群 No.	史料群名
12	三河国渥美郡日出村斎藤家文書
149	近代渥美郡関係文書
105	渥美郡堀切村文書
147	渥美郡堀切村尋常小学校文書
153	渥美郡保美村年貢免状文書
135	渥美郡畠村文書
139	渥美郡畠村松浦家文書
36-7	山田村泉福寺文書
141	渥美郡高木村文書
27	渥美郡江比間村文書
18	田原(野田村)役場文書
80	渥美郡田原町柴田家文書
21	田原文書
103	渥美郡田原町渥美電気株式会社文書
117	三河関係諸文書(渥美郡浦村関係)
89	渥美郡童浦村役場文書
125	島本彦次郎氏旧蔵文書
68	渥美郡高塚村小野田家文書
32	三河国渥美郡小嶋村文書
116	渥美郡小嶋村文書(二)
111	渥美郡関係文書
16	三河国渥美郡大岩村山本家文書
28	渥美郡大崎村文書
36-2	向草間村文書
36-1	橋良村文書
118	渥美郡福岡村芳賀家文書
44	渥美郡牟呂村白井家文書
107	渥美郡牟呂町杉浦家文書
197	三河国渥美郡青竹新田榊原家文書
41	三河国吉田福岡家文書
126	渥美郡吉田宿質仲間文書
93	渥美郡船町鷺野家文書
146	豊橋連隊区関係文書
1	豊橋電気株式会社文書
94	豊橋市戦時文書
201	渥美線電車時刻表
176	河合家関係文書
-	三河国渥美郡馬見塚村渡辺家文書

表1 収蔵史料一覧(旧渥美郡関係分)